

授業研究において 研究主任の働きかけが授業者に与える効果に関する事例的研究

松 葉 大 吾*・勝 海 由里子**・水 落 芳 明***

(平成26年9月8日受付；平成26年10月30日受理)

要 旨

本研究では、小学校の教員が協働して取り組む校内の授業研究において、研究主任が授業研究に臨む授業者にどのような働きかけを行っているか、具体的に明らかにするための調査と分析を行った。授業者の授業研究に対する負担感や不安が軽減された指導案検討会において研究主任の発話を調査した結果、授業者の思いに「肯定的な発話」である「同意」や「提案」の発話が多いことが明らかになった。

KEY WORDS

Leaders of Teachers 研究主任, Lesson Study 授業研究, Sessions for Lesson Plan 指導案検討会, Collaboration 協働

1 問題の所在

中央教育審議会(2012)^①は、「教職生活全体を通じて実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能が陳腐化しないように絶えざる刷新が必要であり、「学び続ける教員像」を確立する必要がある」と報告している。教員が学ぶ場としては、学校外での免許更新講習や法定研修、私的研修団体での研修などもあるが、大部分を占めているものとして、学校内で行われる校内研修が挙げられる。特にその中でも、教員の授業公開をもとに、学校課題や教員としての授業力向上について話し合われる研修、いわゆる授業研究と呼ばれる研修が多く行われている。横浜市教育センター(2006)^②や鹿児島県総合教育センター(2012)^③では、授業研究についてのアンケート調査を行っており、授業研究の有効性を指摘する結果が示されている。

しかし、西尾ら(2010)^④は、授業研究の課題について、授業者が「大勢の教師の目に自分の学級の子どもと教師がさらされ、意見という名のもとで批判され、評価される」ことや「自分の授業が校内授業研究推進に寄与するものでなければ実施する意味はないという重圧」を感じることに、負担感につながることを指摘している。さらに、千々布(2005)^⑤は、近年の学校において授業研究のために授業を公開することをためらう教員が増加してきていることや教員の仕事の多忙化などから校内研修が衰退してきていることを指摘しており、授業者を中心とした負担を授業研究の課題として挙げている。

教師が抱える負担への対応策として、紅林(2007)^⑥は教師の同僚性に期待される機能の1つである癒しの機能を挙げている。癒しの機能とは、気持ちを敏感に察してくれる人や仕事を日頃評価し、認めてくれる人の存在が教師の精神的な負担の軽減に寄与することである。また、小沼ら(2013)^⑦は、同僚性の形成のためには①授業実践の観察②人間関係性が重要であり、この2つの項目の具体的事例の中で、教師同士の協働が重要であることを示唆している。これらのことから、教師の協働と同僚性には深いつながりがあり、教師の負担軽減につながると考えることができる。

授業研究においても協働の重要性が指摘されている。小林(2013)^⑧は、授業研究に向けての授業者の思いや願い(目標)を、教師集団が共有し責任を分担する指導案検討会等の工夫をすることにより、教師らの協働が生まれ、協議会の会話の質が高まり、研究授業に対する教師の意欲や達成感が向上することを報告している。

しかし、小林の研究は、指導案検討会を中心とした校内研修システムのよりよい在り方を明らかにしたものである。杉山(1981)^⑨は、指導案を検討する際の研究主任の役割の1つとして、授業者から質問を受け、積極的に助言することを挙げているが、小林の研究では研究主任の具体的な発話については分析されていない。

そこで、本研究では、協働して取り組む校内授業研究において、研究主任の発話に着目する。研究主任の具体的な働きかけについて、指導案検討会における発話から明らかにするとともに、その働きかけが授業者の意識に与える効果について明らかにすることを目的とする。

なお、本研究において、授業研究に関連する言葉について表1のように定義し用いることとする。

表1 授業研究に関連する言葉の定義

用語	定義
指導案検討会	授業公開する授業の指導案について、授業者や研究主任、校内の教員や外部指導者などと検討し、改善を行う場。
授業公開	研究主題に沿って立案した指導案に基づいて授業を行い、参加者が参観する場。
協議会	授業参観を行った参加者が、授業内容について話し合う場。
授業研究	教員の資質能力の向上を目的とした、上記・指導案検討会～協議会までの一連の展開のこと。

2 研究方法

2. 1 調査時期

平成25年8月～12月

2. 2 調査対象

本研究では、2つの小規模小学校の授業研究を研究対象とする。

①N県公立H小学校（学級数7）

・研究主任1名

（教職経験18年目、H小学校勤務3年目）

・授業者1名

（教職経験12年目、H小学校勤務6年目）

・研究主題

「思考力の向上を目指した「目標と学習と評価の一体化」の工夫」

・公開授業教科・単元名

体育・マット運動（5年生）

②N県公立S小学校（学級数5）

・研究主任1名

（教職経験18年目、S小学校勤務7年目）

・授業者1名

（教職経験6年目、S小学校勤務3年目）

・研究主題

「いきいきと学び合う子の育成～言語活動を通して、自分の考えを様々な方法で表現できる子を目指して～」

・公開授業教科・単元名

社会・古い道具と昔の暮らし（3・4年生）

2つの小学校については、以下の共通点があり、職員の協働を目指すという点において本研究と方向性が同じため、研究対象とした。

①それぞれの研究主任の課題として、職員が協働を発揮する授業研究を挙げている。

②研究主任は、小林（2013）⁽¹⁰⁾にある、「協働する集団」をつくるための手立ての一部（表2）を参考にしながら、授業研究を運営している。なお本研究では、表2に示されている短時間検討会も、指導案検討会と称することとする。

また、本研究の対象となる2つの小学校の授業研究については、表3の展開で実施した。

表2 「協働する集団」をつくるための手立て

①指導案なしディスカッション	研究主任と授業者が研究授業に対する目標を共有するために、まずは指導案をもたずに研究主題を踏まえて、授業の構想に関する話し合いを行った。
②短時間検討会	放課後の時間を使い、15分～30分以内での短時間での指導案検討会を 研究推進部または、学年部2人～4人の少人数集団で行った。

表3 授業研究の展開

H小学校	S小学校
11月 ・授業研究前PAC分析 ・指導案検討会①	8月 ・授業研究前PAC分析 ・指導案検討会①
12月 ・指導案検討会② ・授業公開・協議会 ・授業研究後PAC分析	・指導案検討会② 10月 ・指導案検討会③ 11月 ・指導案検討会④ ・授業公開・協議会 ・授業研究後PAC分析

2. 3 調査・分析

(1) 研究主任の働きかけについて

- ・研究主任の具体的な発話を明らかにするために、授業研究にかかわる指導案検討会において、研究主任の発話をICレコーダーで録音する。録音した発話についてカテゴリー分けを行い、分析する。また、分析結果について、研究主任にインタビュー調査を行う。
- ・研究主任がどのような意識のもとで授業者とかわかっていたかについて明らかにするために、授業研究後、研究主任にインタビュー調査を行い、ICレコーダーで録音する。録音した発話について分析する。

(2) 授業者の意識の変容について

- ・研究主任の働きかけが授業者の授業研究に対する意識に与える効果について質的に分析するため、授業研究前後に、授業者に内藤（2002）⁽¹¹⁾のPAC分析（個人別態度構造分析）を行う。
- ・研究主任との協働が授業者にどのような影響を与えていたかを明らかにするために、授業研究後、授業者にインタビュー調査を行い、ICレコーダーで録音する。録音した発話について分析する。

3 結果

3. 1 研究主任の働きかけについて

①指導案検討会の発話分析

各学校で研究授業前に行われた指導案検討会における研究主任の発話をカテゴリー分けし、発話数を数えた。カテゴリーと定義について、表4に示す。また、発話数を数える際は、意味内容で一まとまりになる発話を1回と数えた。結果は、2つの学校で指導案検討会の回数が異なるため、発話回数と発話の割合で図1に示す。

表4 指導案検討会における研究主任の発話カテゴリー

分類	定義	発話例
同意	授業者の発話を受けて、同意している様子を示す発話	(授業者の発話を受けて) ・そうですね。 ・いいですね。
提案	授業改善のために、アイデアを示す発話	・それなら、〇〇や△△のやり方もありますよ。
咀嚼・整理	前の発話を受けて、分かりやすく具体例を挙げたり、整理したり、意味付けしたりする発話	・〇〇ってことは、△△ってことですね。 ・(多様な意見をまとめて) 〇〇ということですよ。
論題	検討会で話し合っほしい話題を提示する発話	・〇〇の点がまだはっきりしないんだけど、この点についてどうでしょうか？
質問	授業者の意見を聞き出そうとする発話	・〇〇と言っていますが、その点についてはどう思いますか。
話題	上記に属さない、話題に沿った発話	

なお、この分類の妥当性を示すため、事前にEricsson & Simon (1984)⁽¹²⁾によるエリクソンの基準で分析した。この基準では、

1. 分類単位や分類方法を定義する。
2. 2名以上の分類者がその定義に従って分類する。
3. 分類者の分類結果をつきあわせて、それらの80%以上一致している。

これらを通して、分類の妥当性を保障することとした。

本カテゴリー分類に関して、筆者が分類した後、教職経験15年以上の教員に本論における分類を提示した。その後、全ての指導案検討会の音源を聴取し、分類させた。その結果、筆者の分類との一致度は93%であり、エリクソンの基準を満たしていることを確認した。

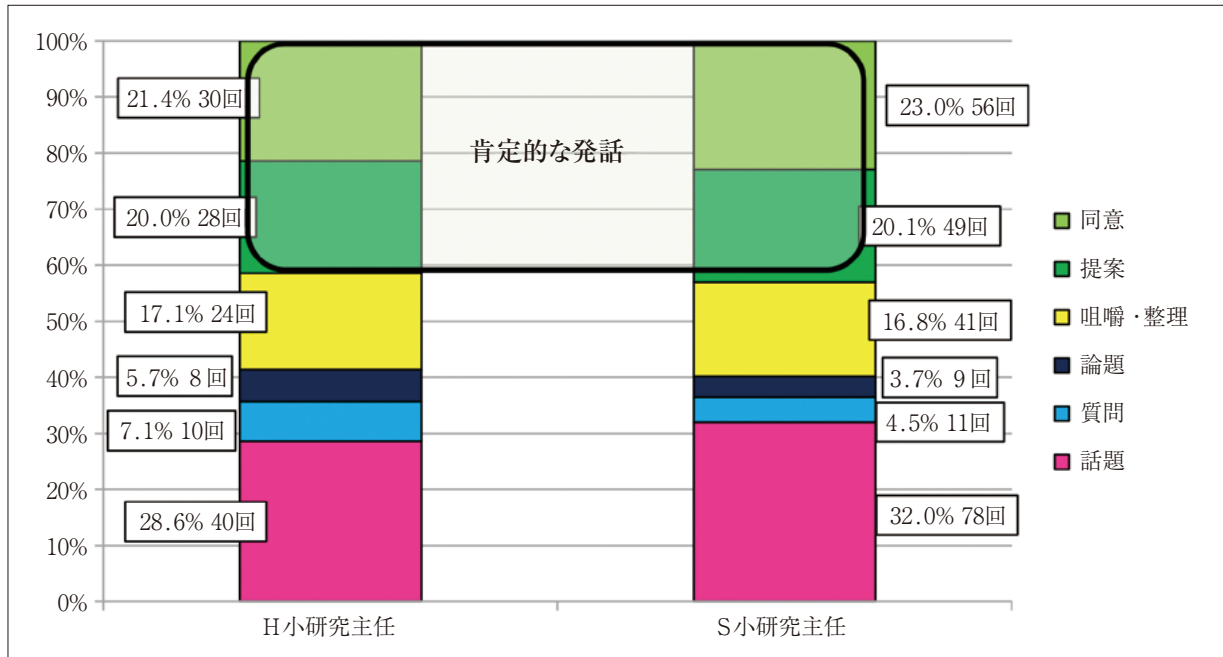


図1 研究主任の指導案検討会における発話の割合

本研究では、紅林 (2007)⁽¹³⁾が挙げた癒しの機能が、仕事を評価し認めてくれる人の存在を一例として挙げていることから、授業者に対して肯定的である発話に着目することとする。授業者に対して肯定的な発話は、上記カテゴリーの中で、「同意」と「提案」に見られた。「同意」の発話の具体例を事例1に示す。授業者がグループ学習による効果について語っているのに対し、研究主任が①でその意見に賛成していることを伝えているということを読み取ることができる。

事例1 指導案検討会における「同意」のプロトコル

(授は授業者、研は研究主任を示す。以下同様)

授：(グループでかかわり合う活動を通して)足が上がらない子に対して、足を持ってあげるよとか…。そういう工夫があって、(目標を)達成できるようになるといいですね。
 研：そうだね。そうやって、(グループ活動での学び合いが)技に生かせるようになると素敵だよ。①

また、「提案」の発話の具体例を事例2に示す。授業者は、学習者に昔の道具を使う実体験を通すことで、昔の道具の工夫や今の道具との比較をさせたいと願っており、その話題になった時の研究主任の発話である。①では、授業者の意図を汲み取ったうえで、洗濯板を使ってはどうかという提案を行っている。

事例2 指導案検討会における「提案」のプロトコル

(授業者が、昔の道具を使う体験をどうしても入れたいという話題の中で)

研：体験をするって考えると、洗濯板。子どもたちに昔の道具を体験させたいっていうのであれば、洗濯板が一番いいかな。①

今回調査した指導案検討会において、「提案」の発話全てが、授業者の思いに肯定的な内容であった。「同意」の発話も授業者に対して肯定的な発話であることから、「同意」や「提案」の発話は、授業者に対して「肯定的な発話」と捉えることができる。

図1を見ると、どちらの学校の研究主任も、発話の割合の上位3つは「話題」「同意」「提案」である。その中で

も、「同意」と「提案」を合わせた「肯定的な発話」はどちらの学校の研究主任も全体の40%を越え、割合において一番多いことを読み取ることができる。この分析結果について、各研究主任がどのようにとらえているかということや、「肯定的な発話」にどのような意図があったかということをも明らかにするため、インタビューした結果を事例3に示す。

①②からは、指導案検討会においては、授業者の思いを生かした授業になるように考えることが大切だという研究主任の思いを読み取ることができる。また、④から、授業者の負担を考えた上で、授業者がやりたい授業を第一に考えていることを読み取ることができる。さらに、③や⑤からは、研究主任が授業者と協働していこうとする姿勢を読み取ることができる。つまり、研究主任は授業者に対して意図して肯定的に接することで、授業者の負担感や不安を軽減させようとしていたということが考えられる。

以上のことから、研究主任は授業者に対して肯定的な態度で指導案検討会に臨んでいることが示唆される。

事例3 研究主任へのインタビュー（自身の発話の割合について）

（質は質問者、H研はH小学校の研究主任、S研はS小学校の研究主任を示す。それぞれの学校で別々にインタビューを実施した。以下同様。）

質：発話の割合の結果を見て、どのようなことを感じますか。
H研：否定はしないように心掛けている①っていうか。（中略）自分が昔（授業者だった時、指導案検討会で）、代案も示されずに、できない理由を言う人が多かったから。できる理由を考えてよっていうのがあるかな。②（中略）一緒に背負ってあげたいってことですかね。③
S研：（授業者が）一番負担を感じているところが大きかったと思うので。結構信念が強いところがあるので、 <u>どういう授業をやりたいのかを考えながら、そこを第一に考えてあげたいなっていう気持ち④</u> があったんですけど。（中略） <u>自分一人じゃないって感じてほしかったかな。⑤</u>

②研究主任への授業研究後インタビューの分析

研究主任が、どのような考え方で指導案検討会を運営し、その結果として授業研究の成果をどのように捉えているのかについて、また、どのような考え方で授業者とかわかっていたかについて明らかにするために、授業研究会終了後、インタビュー調査を行った。研究主任へのインタビュー内容を事例4に示す。

事例4 研究主任へのインタビュー（指導案検討会で気を付けたことについて）

質：指導案検討会をするにあたり、気を付けた点はありますか。
H研：授業者には、引き出し（授業に対する手立て）を増やしてほしいなと思います。① 気を付けているところは、私の案を載せるっていうのは私の指導案になっちゃうから、なるべく <u>いっぱい代案示して、（授業者に）選んでもらっています。②</u>
S研：T先生（授業者）が混乱して（中略）きた時は、教科のねらいと校内研修でできてきていることと照らし合わせて③、 <u>T先生が最終的には判断するってところを大事にしてきたんですけど。④</u> 今回、私はT先生が <u>こうしたいんだなってのはわかった⑤</u> し、逆に <u>こうじゃないのって言われたときに、T先生はこう考えているからと言えたなっていうのが。代弁じゃないんですけど。⑥</u>

①や③からは、研究主任が校内研修のねらいや授業者の授業力向上という視点を踏まえて発言をしていたことを読み取ることができる。また、②からは、提案をしながらも授業者の意思を尊重していることを、④からは、授業者が困っているときには、教科や校内研修のねらいに立ち返って整理した上で授業者に委ねたということを読み取ることができる。さらに⑤からは、研究主任が授業者の思いを共有していることを読み取ることができ、それが⑥のように授業者の代弁をするという行動にまで表れていたことを読み取ることができる。以上のことから、研究主任は校内研修のねらいや授業者の授業力向上を念頭に置きながらも、授業者の意思を尊重し、指導案検討会で肯定的な発言をしていたということが考えられる。

また、授業研究自体の成果について、研究主任にインタビューした内容を事例5に示す。

事例5 研究主任へのインタビュー（授業研究の成果について）

質：研究主任として、今回の授業研究の成果をどのように捉えていますか。
H研：（研修テーマの1つである）子どもと共有できて、しっかり評価もできる <u>目標を意識して授業を組み立てられるようになったなあって。①</u>
S研： <u>授業者の授業力の向上もちろん見られました②</u> が、 <u>今までの授業研究の課題を踏まえた上で授業をしてもらい、成果があったこともよかったですね。③</u>

①や②からは、授業研究によって授業者の授業力が向上したととらえていることを読み取ることができる。また、③からは、校内研修の流れの中で、前回までの課題を受けて授業を行い、成果があったことを読み取ることができる。つまり、授業力の向上や校内研修のテーマを踏まえながら発言をすることで、授業研究としての成果があったと研究主任がとらえていることが分かる。

研究主任のインタビューから、指導案検討会以外の部分での授業者とのかかわりについても言及されていた。そのインタビュー内容の一部を事例6に示す。

事例6 研究主任へのインタビュー（授業者へのフォローについて）

質：研究主任として、授業者にどんなフォローをしましたか。また、どんなことを意識してフォローしましたか。
H研：コミュニケーション。日常会話です。①（中略）検討会をやって不安に思っていることを言っているわけですから、「どうなった」と絶えずかわるような。「気にしているよ、私は。」というメッセージを出していますけどね。② 日々コミュニケーションを意図的にとるようにしている③ので、そこで不安を取り除いてあげれば、授業者ももっと楽にできるのではないかと考えています。④
S研：放課後とかになるんですけど、指導案検討会じゃなくても、どうなっているって声をかけたり、（单元内で）今までの授業の様子はどんなだったって声かけたりとか。できることはない？って声をかけていました。⑤

①③⑤からは、どちらの学校の研究主任も、指導案検討会などのフォーマルな場だけでなく、日常の何気ないコミュニケーションを大切にしているということを読み取ることができる。また、日常のコミュニケーションが生む効果として、②や④から、授業者が一人で授業研究を抱え込んだり、不安になったりさせないようにすることが考えられる。

以上、(1)(2)の分析から、以下のことが示唆される。

○研究主任は、指導案検討会において、授業者に肯定的な態度で参加している。また、指導案検討会だけでなく、日常から授業者の気持ちに寄り添いながらかわることを大切にしている。

3. 2 授業者の意識の変容について

①授業者のPAC分析

分析結果1で明らかになった研究主任の働きかけにより、授業者の授業研究に対する意識が変容すると考え、授業研究前後に授業者のPAC分析を行った。以下にその手順を示す。

①連想刺激文の提示

筆者が以下の連想刺激文を作成し、授業者に提示した。

あなたは、授業研究をすることについて、負担感を感じたり不安になったりしていますか。そして、なぜそのように感じていますか。また、どうすれば負担感や不安が軽減されると思いますか。

②連想項目の入力（PAC分析支援ツールを使用）

授業者が連想刺激文から連想できる全ての項目を、パソコンに入力した。また、連想項目に重要と思われる順番をつけた。

③類似度判定（PAC分析支援ツールを使用）

授業者が、2つの連想項目について、イメージとして互いにどの程度近いかについて7段階尺度（近いと思えば7、遠いと思えば0にカーソルを移動）で判定した。

④クラスター分析とデンドログラムの作成（Let's statを使用）

筆者が連想項目間の判定結果をクラスター分析（ワード法）し、デンドログラム（樹状図）を作成した。

⑤授業者へのインタビュー

デンドログラムのクラスターを取り上げ、クラスターに対してどんなイメージが浮かぶか質問し、名前を決定した。次にクラスター同士の関係や全体を通してのイメージ、連想項目について質問した。

⑥連想項目のイメージ判定

授業者がそれぞれの連想項目のイメージを、プラスのイメージ(+), マイナスのイメージ(-), どちらでもない(0)を判定した。図2は、授業研究前にH小学校授業者に実施したPAC分析で得られたデンドログラムである。H小学校授業者が挙げた11の連想項目は、ユークリッド平方距離25,000に近いところで区切ることができ、5つのクラスターに分けられた。これらのクラスターをもとにインタビューを行った結果を以下に示す。ここでは、授業者と研究主任など周りの職員との協働という観点から、クラスター2に着目した。

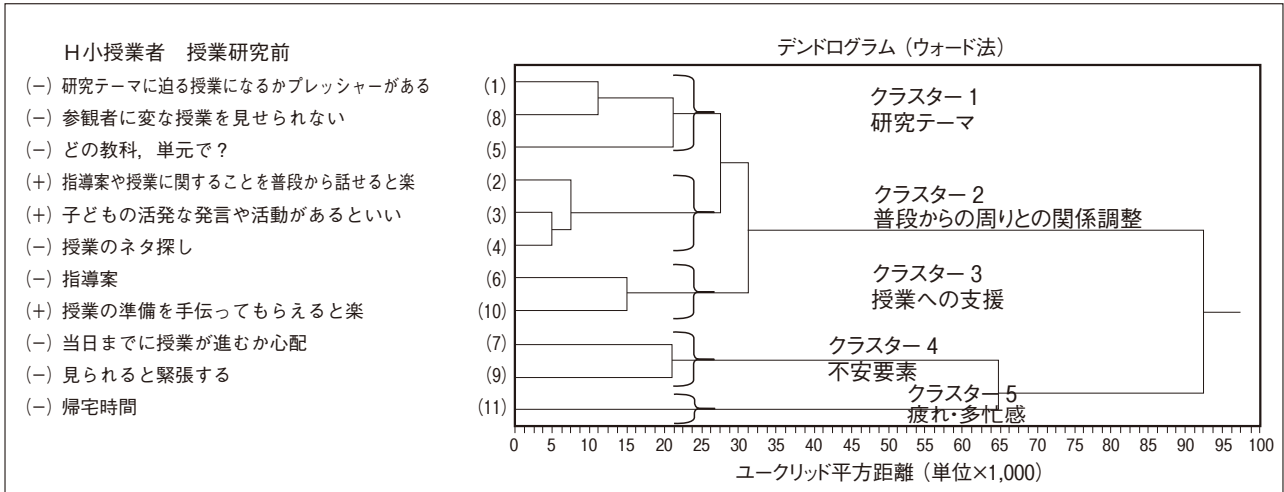


図2 H小授業者の研究授業前のデンドログラム

事例7は、クラスタ2<普段からの周りとの関係調整>についてのインタビュー内容の一部である。①、②より、授業研究の直前になって授業のことを考えるのではなく、日常の子どもたちの見取りが大切であることや、協力できる職員との関係が大切だと感じていることが分かる。しかし、子どもとの関係と職員との関係が混在していたり、②にあるような普段から考えておく内容などについては具体的に言及されていなかったりすることから、授業研究に対する負担感や不安の軽減のための手立てが明確ではなく、実際にクラスタ4のように不安な気持ちであったということが考えられる。

事例7 クラスタ2について (H小授業者の研究授業前)

- ・これは多分、研究授業だけに関するだけでなく普段からの…職員もそうだし子どもたちとの関係①というか、見取りみたいなどころかな。
- ・普段からの周りとの関係調整みたいなどころかな。普段から考えておけば楽かな…普段から考えておけば楽なんだろうな。②

図3は、授業研究後にH小学校授業者に実施したPAC分析で得られたデンドログラムである。H小学校授業者が挙げた15の連想項目は、ユークリッド平方距離100,000に近いところで区切ることができ、3つのクラスタに分けられた。授業研究前に調査したときは、子どもと職員とのかかわりが混在していたが、授業研究後には別のクラスタとなって抽出された。また、授業研究前に存在したクラスタ4<不安要素>や、そこに含まれる連想項目に類するものがなくなっていることも分かる。授業研究後に抽出されたクラスタをもとにしたインタビュー結果を以下

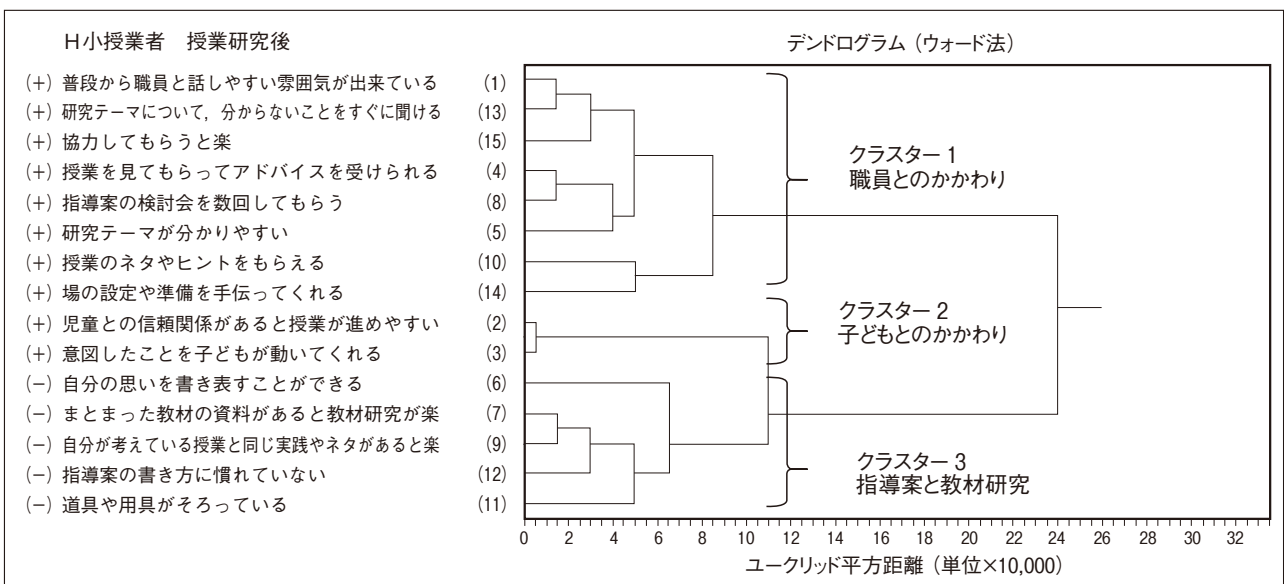


図3 H小授業者の研究授業後のデンドログラム

に示す。

事例8は、クラスター1<職員とのかかわり>についてのインタビュー内容の一部である。①から、今までの経験では、研究授業に向けての取組を一人で抱えていたということを読み取ることができる。一方、今回を振り返った②では、研究主任との協働で指導案を作成できたということを読み取ることができる。また、③からは、授業研究に対する負担感や不安の軽減のために、日常における協力体制構築の大切さに気付いていることが分かる。そのことは、「普段から職員と話しやすい雰囲気が出来ている」や「指導案の検討会を複数回してもらう」という言葉がプラスの連想項目に挙がっていることから分かる。これらのような授業者の意識の変容は、②のように指導案検討会や日常会話の中で研究主任を中心とした周囲との協働から生まれたものであると考えられる。

事例8 クラスター1について（H小授業者の研究授業後）

- ・いつもだったら、指導案書いているときも研究授業しながらも一人で作っていくような気がしたり①（後略）。
- ・（研究主任と）一緒に作れたなっていう意識がありますね。②
- ・一人でやってもいいのができないので、かかわりっていか…常にかかわって行って、協力する体制を作っていけば研究授業も進めやすい③のこなって思います。

図4は、授業研究前にS小学校授業者に実施したPAC分析で得られたデンドログラムである。S小学校授業者が挙げた18の連想項目は、ユークリッド平方距離100,000に近いところで区切ることができ、2つのクラスターに分けられた。これらのクラスターをもとにインタビューを行った結果を以下に示す。

事例9は、クラスター1<本時の授業に関係するもの>についてのインタビュー内容の一部である。連想項目に「周りの先生方の協力や助言」が挙げられたことについて聞いたところ、①より、授業研究の際、周りの先生方との協働がなければ不安であるという気持ちを読み取ることができる。

また、事例10はクラスター2<個人的な気持ち>についてのインタビュー内容の一部である。連想項目に「一人で作り上げる大変さ」が挙げられたことについて聞いたところ、①②より、同じ学年の先生がいないことにより、相談できる人がいないという不安な気持ちを読み取ることができる。また③より、他の職員に聞いてもらいたいという思いを読み取ることができる。つまり、授業者は、一人で考えることについて不安に思っており、周囲と協働しながら授業研究に臨みたいと思っていると考えられる。

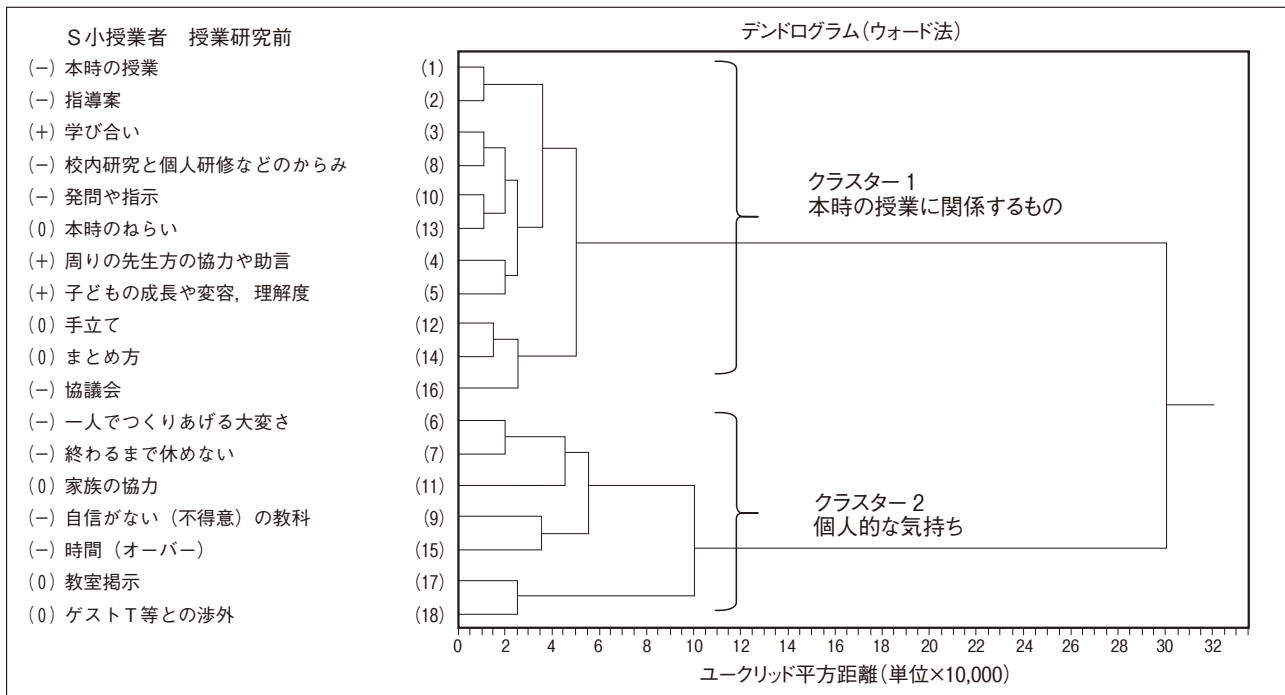


図4 S小授業者の研究授業前のデンドログラム

事例9 クラスター1について（S小授業者の研究授業前）

・先生方の協力ってのが、（中略）その本時っていうのとはちょっと違うのかなってのがあるんですけど、でもこれ（先生方の協力）がないと、正直、できない。①

事例10 クラスター2について（S小授業者の研究授業前）

・この学校は特に、学年が1つしかないから、横見ても同じこと考えている人がいない①ってのが、すごく不安②でも。（中略）不安もあらわれながらも、誰かに聞いてもらって教えてもらいたいというのが正直なところ③で。

これらの事例から、授業者が授業研究に臨むにあたり、自分一人では乗り切ることができないという不安な気持ちでいることや、周囲と協働することで不安を解消したいと考えていることが示唆される。

図5は、授業研究後にS小学校授業者に実施したPAC分析で得られたデンドログラムである。S小学校授業者が挙げた16の連想項目は、ユークリッド平方距離80,000に近いところで区切ることができ、2つのクラスターに分けられた。クラスター自体を見ると、数もクラスター名も大きな変化は見られなかった。以下、クラスター1<授業研究で大切なこと>についてのインタビュー内容の一部を事例11に示す

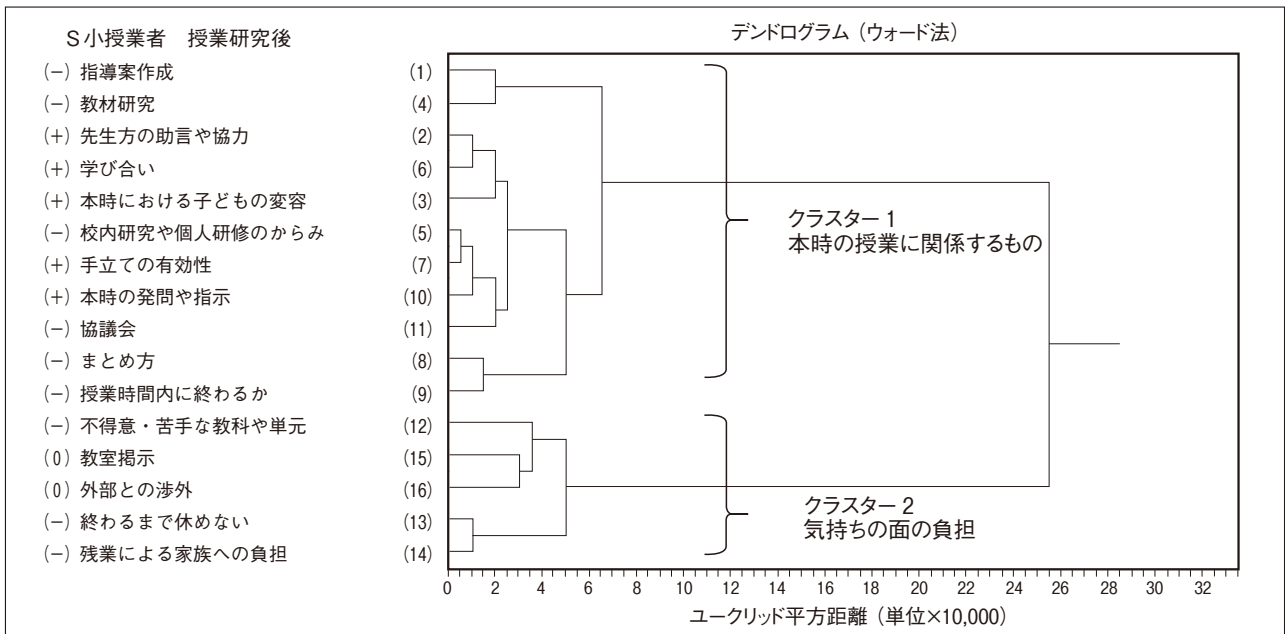


図5 S小授業者の研究授業後のデンドログラム

事例11 クラスター1について（S小授業者の研究授業後）

・今回は指導案検討会を何回もやってもらったので、（指導案検討会をやらなかった昨年度と比べて）よくなった。これでいいのかなってのが修正してもらえたから。①
 ・（放課後の職員室で）こんなイメージでいるんですけどっていうものに対していろいろアドバイスをいただいて、少しずつつくりあげることができたのはよかった。②

指導案検討会を複数回やったことが不安な思いの軽減につながったことを①から読み取ることができる。また②から、指導案検討会以外においてもアドバイスをもらうことにより、少しずつ授業イメージを確立していくことができたことが授業者にとってよかったということを読み取ることができる。つまり、授業者は複数回の指導案検討会やそれ以外の場での指導案についての話によって負担が増えるのではなく、むしろ不安を解消することに有効性を感じていたと考えられる。これらのことが負担感や不安の軽減につながったことが示唆される。

また、クラスター2<気持ちの面の負担>についてインタビュー内容の一部を事例12に示す。

事例12 クラスター2について（S小授業者の研究授業後）

・下（のクラスター）は正直、気持ちなんです。気持ちで…終わってみればそんなでもなかったのかなと思いつつも、①（後略）。負担を感じつつも、解決するためには、先生方の協力とかが必要なんだ②っていうのを（感じました）。

クラスター2に、授業研究前にはあった連想項目「一人でつくりあげる大変さ」がなくなったことについて

・最後は私がつくるんだけど、研究主任のTさんをはじめ、皆さんに助けてもらったからというのが大きいんだと思います。仕事のにも、気持ち的にも。③

①からは、精神的な負担を心配しながらも、実際に終わってみれば負担ではなかったことを読み取ることができる。また、②からは、授業研究前の事例9と同様、他の職員との協働が大切だということを再認識していることを読み取ることができる。また、③からは、研究主任を中心とした職員の協働により、仕事や精神面で負担が軽減されたことを読み取ることができる。つまり、授業者は職員と協働することの大切さを、体験を伴って実感していることが考えられる。

以上、授業者のPAC分析から、以下のことが示唆される。

- 授業者が授業研究で自己の負担感や不安を解消するためには、他の職員との協働が重要であると考えている。
- 研究主任が授業者の思いや願いを尊重しながら発言する指導案検討会を複数回行うことで、負担感や不安を軽減させている。
- 指導案検討会のようなフォーマルな場だけでなく、放課後などにおける日常のコミュニケーションの中での相談も、負担感や不安の軽減に有効であると考えている。

②授業者への授業研究後インタビューの分析

ここでは、授業者が研究主任の働きかけをどのように感じていたかということや、実際に授業研究をしてみてどのように感じたかということなど、PAC分析では言及されなかった点についてインタビュー調査で明らかにする。授業研究終了後、授業者にインタビュー調査を行った。授業者へのインタビュー内容の一部を事例13・14に示す。

事例13 授業者へのインタビュー

(質は質問者、S授はS小学校の授業者、H授はH小学校の授業者を示す。それぞれの学校で別々にインタビューを実施した。以下同様。)

質：研究主任のフォローの中で、印象に残っているものや、負担感や不安が減少したと感じたものを教えてください。

H授：(研究主任は)否定的なことと言わないんですね。いいですね。①やりたいようにさせてもらっている。でも、見てるなーって見てくれているなーって感じがする。②

S授：(ふだんから)やっていることに対して「あ、すごいですね。」とか、「こういうことやっているんですね。」とか。よく声をかけてくださっていましたね。③

事例13の①からは、授業者が自身の思いを肯定してもらえたことがよかったという気持ちを読み取ることができる。また、②や③からは、自分の取組を見てもらっている安心感や、自分の取組が間違っただけでも修正してもらえるのではないかと信頼感があることを読み取ることができる。つまり、研究主任の肯定的な声掛けが、授業者の不安の軽減につながったと考えられる。

事例14 授業者へのインタビュー

質：授業者として、今回の授業研究に関して、負担に感じた面はありましたか。

H授：指導案作るときには、書くのが本当にへたくそなので大変だと思いましたけど、今回の授業は楽しめたかなというか、そんなに負担は感じなかったかな。①いままでだったら感じていましたね。もう～。今回は感じなかった。今回特に協力していただいとところが大きかったかなと思いますね。②

S授：みなさんにたくさんフォローしていただいて、研修成果としても得るものがあつた。③どうせやるなら、こんな体制でまた(授業研究を)やれたらって思いますね。④

事例14の①からは、授業者が今回の授業研究に対して負担感を感じなかったことを、②からは、その理由が職員の協働であったことを読み取ることができる。また、③からは、負担感のことだけでなく、校内研修としての成果が得られていると感じていることを、④からは、職員の協働が得られる状況という限定的な環境においてはあつたものの、授業研究に対する意欲が高まっていることを読み取ることができる。つまり、研究主任をはじめとした職員との協働が、校内研修における成果や、授業者の負担感の軽減につながるだけでなく、授業研究に対する意欲の向上にも効果があると考えられる。

以上、授業者の授業研究後のインタビュー分析から、以下のことが示唆される。

○研究主任の授業者に対する肯定的な働きかけや声掛けにより、授業者の授業研究に対する負担感や不安が軽減される。また、授業研究に対する意欲が高まる。

4 結論

本研究では、小学校の職員が協働して取り組む校内の授業研究において、研究主任が授業研究に臨む授業者にどのような働きかけを行っているか、具体的に明らかにするための調査と分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①研究主任は指導案検討会や日常における授業研究に関する話し合いにおいて、授業者の思いや願いに肯定的な姿勢で授業者とかかわっている。
- ②上記①のような、授業者に対する研究主任の、校内研修のねらいや授業者の授業力向上という視点を踏まえた肯定的な働きかけや声掛けにより、授業者の授業研究に対する負担感や不安が軽減する。

5 課題

本研究では、指導案検討会における研究主任の発話に焦点を絞って調査を行ってきた。指導案検討会における研究主任以外の職員の発話や、研究主任以外の職員との協働について調査することで、授業者の授業研究に対する意欲向上のメカニズムを体系的にとらえることができると考える。

参考引用文献

- (1) 中央教育審議会：「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm（参照日 2013.7.10）
- (2) 横浜市教育センター：「授業力向上の鍵」，p.6，2006。
<http://www.edu.city.yokohama.jp/tr/ky/k-center/kenkyu/jugyouryokukoujounokagi.pdf>（参照日 2014.2.26）
- (3) 鹿児島県総合教育センター：「みんなで取り組み，学び合う授業研究 ～授業力やチームワークの向上を目指して～」，
p.1，2012。
<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/research/research/project/pdf/panhuretto.pdf>（参照日 2014.2.26）
- (4) 西尾朋子・石川英志：「校内授業研究の現状と今後のビジョンの構築」，岐阜大学教育学部研究報告，教育実践研究，12，
pp.275-292，2010。
- (5) 千々布敏弥：「日本の教師再生戦略」，pp.102-107，教育出版，2005。
- (6) 紅林伸幸：「協働の同僚性としての《チーム》－学校臨床社会学から－」，教育学研究，74(2)，pp.174-188，日本教育学会，2007。
- (7) 小沼豊，蘭千壽：「教師を支える「教師用援助シート」の有効性についての一考察－「同僚性」(collegiality)に着目して－」，千葉大学教育学部研究紀要，61，pp.305-311，2013。
- (8) 小林克樹：「校内研修における教師の協働が研修意欲に与える効果に関する事例研究」，教育実践研究，23，pp.301-306，
上越教育大学学校教育実践研究センター，2013。
- (9) 杉山正一：「校内研究のすすめ方－研究主任のリーダーシップ－」，教育開発研究所，p.133，1981。
- (10) 同上書(7)，p.302
- (11) 内藤哲雄：「PAC分析実施法入門 [改訂版]」，ナカニシヤ出版，2002。
- (12) Ericsson, K. A. & Simon, H. : Protocol analysis-Verbal reports as data, MIT Press, 1984.
- (13) 前掲書(6)

A Case Study on the Effect of the Leaders of Teachers Study Encouragement on Teachers in Lesson Study Project

Daigo MATSUBA* · Yuriko KATSUMI** · Yoshiaki MIZUOCHI***

ABSTRACT

The purpose of this study is to examine how the leaders of teachers study helped teachers through giving advice or his/her ideas during a lesson study project conducted in collaboration with fellow teachers in an elementary school. We analyzed the conversation during sessions for lesson plan consultation and found that the leaders of teachers study positive feedback, such as words of agreement or suggestion, helped to reduce the teachers' burden and anxiety.